

はじめに

これは、肢体不自由教育研究部が平成11年度から13年度までの3年間に、各地に様々な協力者や協力機関を得て取り組んだ「障害をもつ子どもへの馬の特性を利用した指導に関する研究－自立に向けた心身一元的な指導に焦点をあてて－」のまとめです。なお、本報告書では研究課題にある表記「障害をもつ」を「障害のある」に変更しています。

近年、「乗馬セラピー」や「ホースセラピー」と呼ばれて、障害のある人々に対する教育や療育が社会的な注目を集めています。しかし、我が国の現状では「馬」と障害のある人々の教育や療育を関連させて想像してみることは、まだ決してたやすいことでも一般的なことでもないように思います。

この研究を企画した際も、実際に行っている過程でも、「なぜ馬なのか」「そのような一般的でない内容を扱うことが日本全体の障害のある子どもの教育に果たして役立つのか」という意見が内外にありました。しかし、この研究をすすめるなかで、この内容を取り扱うことが障害のある子どもの教育に関する考え方や方法のこれまでを振り返るいくつもの視点や、今後の在り方を模索するヒントやアイデアを非常に多く含んでいるものであるという見通しを少しずつ持つことができるようになりました。現在この領域に多くの人々が関心を持ち、この10年の間にいくつかの地方自治体がこの領域を取り上げるようになりつつあるのも、関係者のこういった実感が背景にあるのではないのでしょうか。

1950年代以降、ヨーロッパやアメリカ文化のなかで「草の根」的に始まったこの領域は、今、障害のある人々の教育ではプールの指導や音楽を通じた指導とともに欠くことのできないものとして定着しつつあります。かつて日本にはたくさんの馬が飼育され、生活の場とともに暮らしていました。柳田國男の「遠野物語」や「遠野物語拾遺」をはじめ、昔の日本人の生活を扱った話には馬がここに登場します。そして今も毎年1万頭以上の馬が日本では生産されています。そして、日本には現存する在来種が8種類あり、保存育成されています。しかし、馬と私たち現代人との距離は遠く隔たってしまっています。これは、特に戦後日本の社会が農業の機械化や効率化を目指してきた反映とも言えます。

本研究の主題は、「障害のある子どもへの馬の特性を活用した指導に関する研究」というものですが、馬はモノではありません。生きた存在です。その意味からすれば、本研究は、馬は子どもの学習のパートナーといっても良い存在であり、それを指導者がどのように活動全体として組み立て、豊かな内容にするかということについて取り上げたと言うことができます。

本研究は、馬に関する専門家や馬のいる機関、この領域を実践する学校等のご協力を得て実施したものです。ご協力いただきました皆様方に心から感謝いたします。特に調教師である高橋公正氏には多大なご協力をいただきました。

この成果は、「指導のねらいと評価」という次の研究内容へと引き継がれ、実施の途上にあります。ご忌憚のないご意見、ご感想をお寄せください。

平成15年3月

肢体不自由教育研究部